

キューバの人気作家、レオナルド・パドゥーラのインタビュー

キューバにレオナルド・パドゥーラ（1955年ハバナ市生まれ）という推理小説作家がいます。日本では、『アディオス、ヘミングウェイ』宮崎真紀訳（ランダムハウス講談社、2007年）が出版されていますが、あまり知られていません。しかし、キューバでも、国際的にも、



も、マリオ・コンデ警部補シリーズで広く読まれている作家です。代表作『秋の風景』で、1998年、ダシール・ハメット国際推理小説賞を受賞した他、キューバ国内でも数々の賞を受賞しています。最新作の小説、『犬を愛した男』（エディシオネス・ユニオン、ハバナ、2010年）、メキシコにおけるレオン・トロツキーの暗殺事件(1940年)の首謀者、ラモン・

メルカデルの人生を描いたもので、発売と同時に売り切れてしまいました。キューバ国内では、もっとも人気のある作家のひとりといってもよいでしょうか。

その彼が、最近、ドイツの通信社DPAとキューバでインタビューを行い、その内容の大胆さ、真摯さ、率直さ、的確な政治・社会分析から、広く配信され、内外で共感を読んでいます。そのハイライト部分を紹介しましょう。

「ソ連の社会主義の問題をも扱ったこの本は、キューバ人作家の多くの作品のように、机の引き出しにしまわれて、キューバで刊行できるとは思わなかった。これは、ソ連の革命の過程が疲弊して、消滅した現在の時点で、キューバ人の観点から書かれた小説である。キューバの状況が実際変わったから、書くことができたのである。明らかに、フィデル執政のキューバとラウルの執政のキューバは同じものではない。私は、意見を述べ、異議を唱え、なお書き続けることができる場が広がったと感じている。

この5年間で、特定の本質的な政治的な変化はないが、実際重要な一連の変革が、生まれている。それらは、基本的には経済的なものであるが、政治的なものもある。ラウル・カストロの行っている変革は、自営業種の拡大、農民への土地の使用権の貸与、以前禁止されていたモノやサービスの使用許可、国外移住政策の変更、『黒い春』の75名の政治囚(2003年3月逮捕)の釈放などであり、キューバ社会に大きな変化を招きつつある。

フィデルが、2007年7月一時的に権限をラウルに引き渡したとき、こうした変化が5年間で起きるとは思わなかった。今では、次の5年、あるいは10年でどうなるかは、さらに予想が難しい。というのは、実際、いろいろは変革が具体的に始められているからである。それらは、本質的なものではないが、重要なものであり、目に見えるもので、別ないろいろは変化を生み出すであろう。

ラウルが進めている経済改革は、社会主義を現状に適応させる以上のことで、経済制度の改革である。しかし、キューバのマスメディアは、まだ十分にはこの機会を活用していない。というのは、何年もの間の慢性的な病気に引きずられており、それを克服するのは容易ではないからである。マスメディアは、現在の状況を反映しれおらず、読者、キューバ市民の必要からはるかに遠いものとなっている。

キューバ政府の観点の変化は、重要で、政治の観点から経済を見ることから、経済の観点から政治を見るようになってきている。この変化によって、政治的な部門においても変化が生まれるであろう。経済の変化は、政治的・社会的変化をもたらすと思う。どのように、何時、どういう方法で、何時まで、どの程度の深さで、ということ进行を予言することは難しい。しかし、われわれは、無行動の状態から行動に移ったのである」。